

# 春燈

11月号

November 2018



主宰の句

安立公彦

爽やかに五輪の火点る生きめやも

宿年や水引草の紅褪せず

麴麴売りにしばし鳴き止む秋の蟬

線描に水澄む総の野川かな

天降る神待つ一樹今日の月



# 久保田万太郎の句

## 誰一人日本語知らぬ白夜かな

『冬三日月』昭和二十七年

オスロの国際演劇会議に出席した折の、師の数少ない海外吟の一句である。青白く暮れなずむ白夜の北欧。つかの間の夏の夜を楽しむ人々の賑やかな往来。言葉の通じないやる瀬無さを、白夜がつつみ込み、旅愁を深めている。ありのままの情景と、胸裏のつぶやきを、写生を越えた詩に昇華させてしまう、誰も真似の出来ない、万太郎ならではの詩ごころを学び直した。

ト 部 黎 子

# 久保田万太郎の句

## 短夜のあけゆく水の匂かな

『春燈抄』昭和二十二年

戯曲「短夜」のラストシーン。知人の別れ話に、決断を下したものの、専造の心に苦渋が滲む。

「有難え、空がもう白んで来た」このセリフに掲句を重ねてみる。感覚の鋭さが、リズムの良さが、朝の光と、たゆたう水の匂に、希望と力を予感させる。

水彩画のような十七音の影に秘められた、人間の織り成すドラマがあったのである。

荒井 慈

# 燈下集



○ 割田容子

初秋の空に産衣の白さかな  
宿帳を綴る紙繕や鳳仙花  
民宿の足踏みミンシン青胡桃  
新生姜ほどよく地酒届きけり  
牧水忌山河背ヲに水澄めり

○ 小泉貴弘

夏霞一枚となる空と海（熱海）  
炎天や忍の一字の鬼瓦  
てるてる坊主吊ししままや日の盛  
蛇を見て蛇に吞まれし夢を見し  
修行僧同心円に水打てり

○ 戸辺信重

三十二度涼しと思ふ氣象とや  
何時からか盆に帰らぬふるさとほ  
甜瓜手のひらにのる昭和かな  
聞耳を立て暗がりの初ちちろ  
アスファルトぬくもり残し空は秋

○ 林紀夫

玉音の記憶の薄れ終戦日  
秋めくや体慣らしの書肆巡り  
早稲の香や足取り軽き鼓笛隊  
生国へ馳する想ひや温め酒（祝・『湖心』上木）  
記載なき賞味期限や鴟の贅

○ 中野さき江

髪切つてぬきさしならぬ夏の果  
流灯の流れにのれぬ未練かな  
胸に棲むその名の疼く遠花火  
辻曲がるをんな振り向く秋の蝶  
蜉蝣や恋もて終はる死はそこに

○ 成田なな女

校庭の少女の像や秋高し  
天高し馬の背といふ峠かな  
右左別るる川や秋の声  
カンナ燃ゆ旅装束の大師像  
ひろびろと三河平野の秋ざくら

○ 栗原完爾

風神の埃まみれの秋暑かな  
泡をどるコップの水や厄日来る  
庭草に疲れ見えたる子規忌かな  
男衆の太き二の腕泣き相撲  
新涼や手よりころがる瓶の蓋

○ 松本俊介

大空へ母の笑ひし終戦日  
雲流れつつ夏果の転車台  
顔に受け合点したり初嵐  
ある朝の屋敷畑のもずの糞  
残り菓子包んで持たす秋夕焼

○ 小菅礼子

籠り居の瑟々待つや今朝の秋  
夕風の誘ふ径々稲は穂に  
梅干すや夜空仰ぐも久しかり  
おだやかに過ぎしを謝すや終戦日  
「クーラーを使つてますか」との電話

○ 生田高子

御積りの余韻味はふ夜の秋  
汽水湖の土用蛭や朝の膳  
寄り道をする家二、三新生姜  
敗戦日記憶の空の青さかな  
百合樹の一葉が病めりつくつくし

# 当月集

安立 公彦選



○ 小山 繁子

新涼や漁師訛の魚市場

秋風や海の匂ひの旅鞆

畳なはる波のさきさき秋夕焼

かなかなの暮色誘ふこゑの張り

秋澄むや昨夜の雨滴の軒蔭

○ 藤丸 誠旨

秋蟬の疲れし声に涙すや

手花火の火の雫落つしばし闇

盆踊この世の人の輪の巡り

忌と熱に満ちし八月終はりけり

野仏の彫り人知らず秋の風

○ 齋藤 晴夫

老鶯の翠巒幾重御坂路

白雨来るくろがねの富士消しながら

風かよふ飛白上布の浴衣かな

み仏の灰あそび足土用東風

虹の橋西方浄土へ渡りたし

○ 神田 恵琳

天領の妻入家並秋簾

たが呼ぶや花野の風のはたと止み

秋の風孔雀の開く音とまがふ

来し方を絵巻と見るや秋夜闌け

蘆刈の横利根日和田舟置き

○ 西岡 啓子

それぞれの暮しの屋根や稲びかり

道の辺のミントの花や今朝の秋

雲にまだ力ありし残暑かな

おんぶばつた如雨露の水に飛びだせり

上げ潮の河口にぎはふ鯨日和

# 春燈の句

安立 公彦選

砧打つ今は男も待つ身とや

観音の指先細き秋思かな

秋の蝶寂しさ見せず戯るる

秋夕焼明日への望み赤々と

暮れぎはの一刻忙し法師蟬

呼応して蝸谷となる日暮

水澄むや故里いまも釣瓶井戸

草の花道々足して供花とせり

欄干にもたれお伝え橋涼し(浜離宮三句)

秋立つや風の十字路通り抜け

潮入の水門高し秋燕

木槿垣今朝咲く路地を急ぎけり

新涼や看護士の声透き通る

蕪の花雨の狭庭に天目指す

パンコク 大口 堂遊

神奈川 新海 英二

東京 坂入 妙香

広島 川崎 雅子

秋郊にふるさとを見る旅住まひ

大荒れの一と日なりけり震災忌

迎火を独り焚く日となりしかな

棚経の美声につられ座に着きぬ

二百十日事なきを得し港町

流灯会河口の浪のやさしかり

硫黄島ゆ葉書古りたる敗戦忌

古代蓮その実をうつす水面かな

虫の夜の北斗七星かぞへけり

崩れざる洗面ながき生身魂

美術展手つなぎ歩く夫婦かな

口数の少なき妻の秋扇

秋うらら窓際指定のロマンスカ―

新涼や酒注ぐひとの細き指

千葉 渡辺 睿子

茨城 石橋 邦子

東京 横山 さくら



# 余言

安立公彦

新益や風なき庭を見てをりぬ

三上 程子

この「新益」は、作者の弟さんの夫人。もとより甥御、姪御、それぞれの家族もあろう。作者はいま自宅の縁側に坐して、庭前の草木を見ている。思いはいつか亡き義妹に及び弟さん一家に及ぶ。

今年の夏は暑かった。月遅れの盆の頃も、風のない夕ぐれの暑さは身に応える。この句、「風なき庭を見てをりぬ」に、作者の思いが遍く表現されていて、その思いが、「新益」とよく呼応している。思いの深い句だ。

われを生みくれし母恋ふ葉月かな

諸戸せつ子

これは一般論だが、俳句に詠まれる「母」は常に恋われ慕われている。今月の投句の中にも母の句は多かった。

そういう「母」の中でこの句は「われを生みくれし母」である。誕生以後の「母」の句ではない。そこにこの句の独自性がある。顧みて、作者もその母も充実した人生を送って来たのであろう。「葉月」が良く一句を締めている。

尚、今年の葉月は、九月五日から十月四日まで。中秋の名月は十九日、秋分の日は二十三日だった。

盆用意仏に近き我が身もて

萩原 すみ

萩括る手だてを妻にたよりけり

松橋 利雄

秋の七草の中で、萩は古来ことに詩歌に詠まれて来た。戦後の俳句では、へある日ひとり萩括ることとしてをりぬ敦の句に、えも言われぬ現代人の憂萩を見る。

この句、乱れた萩を括る手だてを夫人に託したという。それだけの句だが、下五の「たよりけり」を見て改めて作者の身の上に思いを致す作品だ。作者は「右変形性股関節症」を患い、その後「人工股関節」の手術のため再入院。その間二年近い闘病生活を送る。幸いリハビリの経過も良く、最近では二千歩余の散歩も可能になるまでの回復を見るようになった、と聞く。何よりも喜ばしいことである。しかしそういって作者の背景を知らない人にも、この「妻にたよりけり」は、静かにそして確かに読者の胸に語りかけてくるものを持っている。そういう一句だ。

今月は盆の句が多かった。よく盆と正月と言うが、盆は正月よりむしろものごとを思う季節にふさわしい。

この句、「仏に近き我」が絶妙だ。卓絶した人世観と言うべきか。むしろ達観の語がふさわしい。傍目にもしつかりした老婦人と見られている作者だろう。「盆用意」に限らず為し得る日常を、これからも達観の思いで観察した句を作って頂きたい。ちなみに作者は九十六歳、素晴らしい。

逢ひたき人多し迎火時かけて

白神知恵子

逢いたい人が多いと言うことは、対象が故人であるだけに、作者は幸せな生活を送って来たということだ。

市街地化された近郊の住宅地では、門火を焚くという風習も次第に薄れて来ている。作者の住む地域には今も門火を焚く慣わしが続いているのだろう。先祖の精霊を迎える「迎火」に刻かける作者。「逢ひたき人」は今も作者の胸奥に甦る。「時かけて」にその思いが良く籠められている。

流灯の寄り来る岸辺明りかな

高埜 良子

灯籠流しは今もあらゆる地域で催されている。盂蘭盆会の終りを占めるいかにも情緒豊かな行事である。

この句、寄り添って流れている灯籠が、或る地点に来ると何故かその岸辺に惹かれるように次つぎと集つてくるといふ。その岸辺には幾組かの人たちが立ち止まって流灯を

見ている。この「岸辺明り」は目に見える明かりではない流灯を見守る人びとの思いと、流灯の明かりが信仰として結びついたもの。恐らく作者もそう見たのだろう。

飛石のほどよき湿り今朝の秋

篠原 幸子

「飛石」は日本建築特有の資材の一つ。多くは庭園に雅と実用を兼ねたものとして用いられている。

この句、「ほどよき湿り」がみごとだ。この中七により庭園の有り様が、背景の日本家屋とともにさまざまに連想される。しかも季節は長い夏も終わった秋立つ日。ほどよい湿りのある飛石を踏んで行く人は、やはり和服姿の女性が似合う。わずか飛石一つで、これほどの内容を収め得た作者の表現技法は素晴らしい。

それぞれの暮しの屋根や樋ひかり

西岡 啓子

東京の大病院に入院したことがあった。眼下に住宅の一画があり、夕方になると家々に灯が点る。その灯を見ていと生活という言葉が懐かしく浮かんで来るのだった。今、高階から見下ろす作者。天に稲妻が閃き、一瞬眼下に民家の屋根が展開する。その屋根一つごとにそれぞれの暮しがあると考える作者。具体的な表現の中に、景と対象を見守る作者の暖かい目差が過不足なく詠まれている。